

塚 の 越 古 墳

1991

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

卷首図版



塚の越古墳基底部検出状況

序

近江町は、豊かな自然環境に恵まれ、その肥沃な土壌の上に今日まで発展して参りました。この度報告いたします「塚の越古墳」は平野に位置する後期の前方後円墳として知られていましたが、今回の調査によってその正確な規模を明らかにすることができました。

「塚の越古墳」をはじめ先人の残した数多くの諸遺跡は、近江町の歴史・文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産です。これらの貴重な文化財を後世に伝えていくことは現代に生きる我々の責務といえます。

この報告が地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために幾分でも寄与することができれば幸いです。

末筆になりましたが、この調査に御協力いただきました関係諸氏・関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

近江町教育委員会

教育長 木田源三郎

例　　言

1, 本書は、滋賀県坂田郡近江町内における県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財（塚の越古墳）の発掘調査の報告書である。

2, 発掘調査は平成元年度に実施し、平成2年度に整理調査を実施した。

3, 調査は滋賀県の依頼により、近江町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体　近江町教育委員会　　教育長　木田源三郎

調査事務局　近江町教育委員会　社会教育課　課長　須戸　茂樹

係長　世森　増信

主任　宮崎　幹也

調査補助員　南　孝雄（現・京都市埋蔵文化財研究所）、

中川治美（中京大学学生）、橋本和恵（滋賀大学学生）

発掘作業員　広瀬清左エ門、広瀬長吾、村岡勝次、北居憲治、近藤喜美子

吉居靖子、小原八重子

4, 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

赤塚次郎、赤澤徳明、石野博信、泉　　武、江谷　寛、大橋信弥、小笠原好彦

柏淵辰次、柏淵宏昭、桂田峰男、鐘方正樹、萱室康光、河内一浩、葛野泰樹

白井忠雄、高居芳美、高橋克壽、高橋順之、田中勝弘、千賀　久、千葉　豊

土井一行、田路正幸、中井　均、中井正幸、中島和彦、中村健二、中川通士

中司照世、西田　弘、濱口和弘、林　博通、林　純、平井美典、古川　登

古野四郎、細川修平、松下　彰、丸山龍平、森　浩一、用田政晴、吉田秀則

吉水眞彦　　　　　　　（五十音順、敬称略）

5, 発掘調査および整理調査にあたっては下記の団体の協力を得た、記して謝意を表する。

金城測量設計株式会社（空中写真測量・遺物実測）、有限会社柏淵建設（発掘機械）、

東亜工業株式会社（調査器材）、滋賀建機サービス有限会社（調査器材）、有限会社真

陽社（報告書）

6, 本書で使用した方位は新平面直角座標系VIによった。また標高はT P（東京湾平均海面高度）を用いた。

7, 本書の執筆・編集は宮崎幹也がおこなった。

目 次

| | |
|--------------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 4 |
| 第3章 調査結果の概略 | 6 |
| 第4章 調査の視点 | 8 |
| 第5章 ま と め | 17 |

挿図目次

| | |
|------------------------|----|
| 第1図 塚の越古墳位置図..... | 1 |
| 第2図 塚の越古墳と周辺地形図..... | 2 |
| 第3図 息長古墳群の配置..... | 4 |
| 第4図 塚の越古墳全体図..... | 6 |
| 第5図 検出した後円部と周濠..... | 7 |
| 第6図 円筒埴輪実測図(1)..... | 9 |
| 第7図 円筒埴輪実測図(2)..... | 10 |
| 第8図 円筒埴輪実測図(3)..... | 11 |
| 第9図 円筒埴輪実測図(4)..... | 12 |
| 第10図 塚の越古墳の円筒埴輪..... | 13 |
| 第11図 盾型埴輪実測図..... | 14 |
| 第12図 形象埴輪実測図..... | 15 |
| 第13図 出土した土器..... | 16 |
| 第14図 狐塚 5号墳出土円筒埴輪..... | 17 |

図版目次

- 図版 1 塚の越古墳空中写真
- 図版 2 塚の越古墳全景
- 図版 3 (上) 全景(南西より) (下) 後円部全景(南西より)
- 図版 4 (上) 調査風景 (下) 試掘調査トレンチ
- 図版 5 全景空中写真
- 図版 6 検出した後円部
- 図版 7 (上) 後円部精査状況 (下) 後円部の葺石
- 図版 8 (上) 周濠の土層堆積 (下) 周濠の土層堆積
- 図版 9 (上) 石見型盾埴輪出土状況 (下) 石見型盾埴輪出土状況
- 図版 10 (上) 石見型盾埴輪出土状況 (下) 石見型盾埴輪出土状況
- 図版 11 (上) 前方部横埴輪出土状況 (下) 前方部横埴輪出土状況
- 図版 12 (上) 前方部横埴輪出土状況 (下) 前方部横埴輪出土状況
- 図版 13 (上) 蓐石と転落した石 (下) 盾型埴輪出土状況
- 図版 14 (上) 後円部遠景 (下) 蓐石崩落状況
- 図版 15 出土遺物
- 図版 16 出土遺物

第1章 はじめに

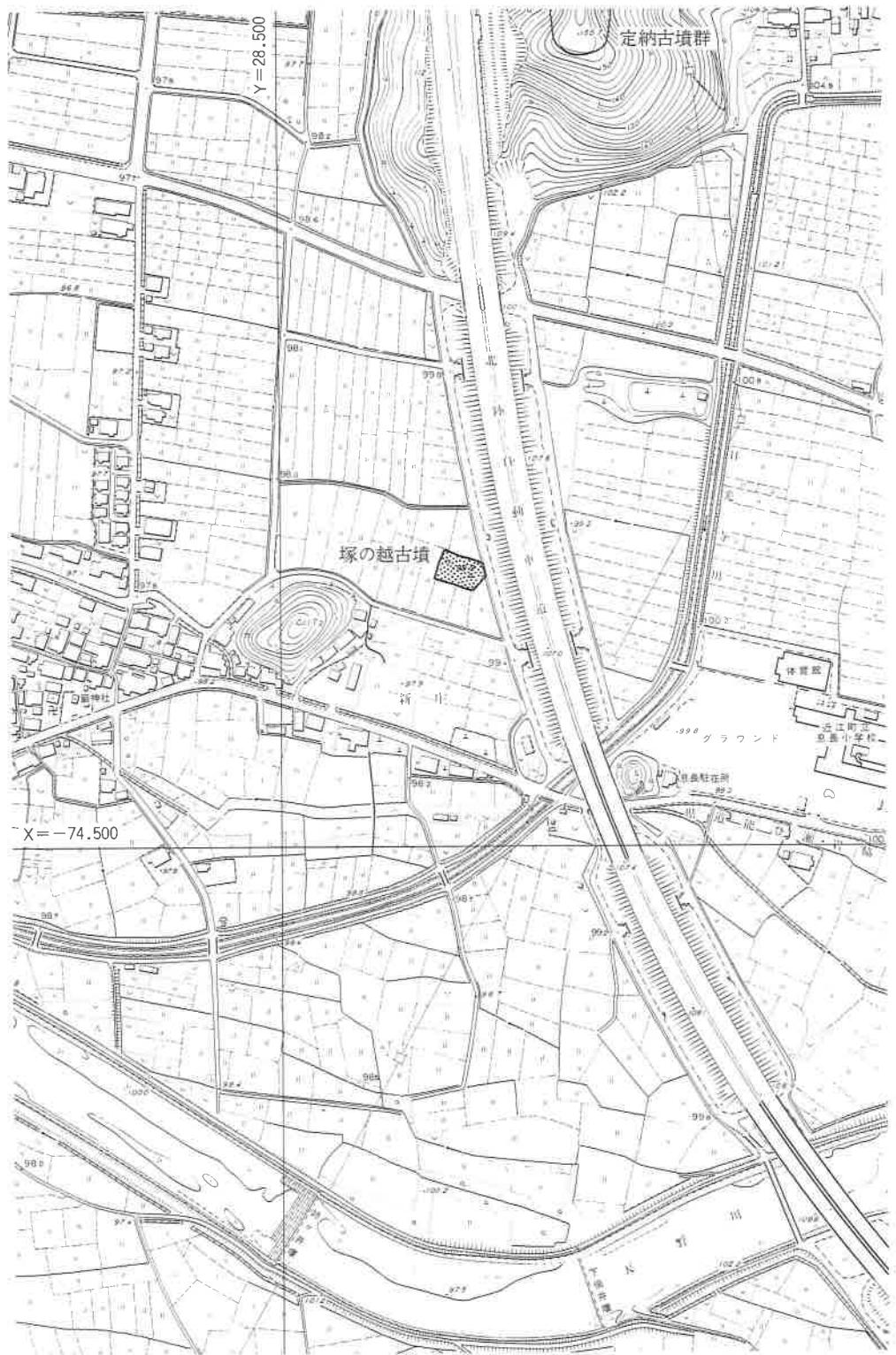
滋賀県農林部の実施する県営ほ場整備事業は、毎年多くの埋蔵文化財包蔵地との調整がなされてきた。県内北東に位置する坂田郡近江町においては、平成元年度の同事業天の川東部地区新庄・箕浦・額戸工区で7箇所の遺跡の調整協議がなされた。ここで対象となった遺跡は、埋塚遺跡・淨蓮寺遺跡・新庄（箕浦）城遺跡・稗田遺跡・高溝遺跡・額戸遺跡と塚の越古墳である。

これらの遺跡については、一部を除いて実態の不明なものが多く、事前の試掘調査によって遺跡の範囲、工事による影響の度合、さらに遺跡の性格等を追及することになった。調査は、滋賀県農林部が滋賀県教育委員会に依頼し、さらに近江町教育委員会に委託され実施された。

埋塚遺跡は、「古墳伝承地」として周知される畠地と周辺の遺物散布地から構成されており、試掘調査の結果から、ほ場整備事業の切土工事によって、遺構への影響が具体化し、発掘調査へと発展した。発掘調査の詳細については、既に報告書によって公表されている



第1図 塚の越古墳位置図 (S=1:100,000)



第2図 塚の越古墳と周辺地形図 (S=1:5,000)

と注1こであるが、弥生時代から平安時代に至る複合遺跡であると判明した。当初、古墳と予測されていた畠地は後世の盛り土であったが、遺物の出土傾向から、5世紀末葉の古墳を削平して平安時代前期の建物群が構築されたことが明らかになった。

淨蓮寺遺跡は、「中世遺物の散布地」として周知されていたが、こちらも複合遺跡であることが判明した。遺跡の中心部については、工事の設計変更によって現状保存されることになったが、南北の両端部に発掘調査の必要が生じた。北端部の発掘調査は、近江町教育委員会が担当し、旧顏戸川の埋設土砂から多くの中世遺物を発掘した。注2また南端部の発掘調査は、滋賀県教育委員会と助滋賀県文化財保護協会が担当し、縄文時代後期の甕棺墓、飛鳥時代の集落遺構、室町時代の遺物包含層などを検出した。注3

新庄（箕浦）城遺跡は、「中世今井氏の居城」として周知されており、滋賀県教育委員会と助滋賀県文化財保護協会が担当する発掘調査へと進展し、堀に囲まれた邸宅跡が発見された。

稗田遺跡は、従来より「遺物散布地」として周知されてきた。試掘調査では、古墳時代前期の遺物包含層が確認されたが、ほ場整備の工事から受ける影響は無く、地下に現状保存されることになった。

高溝遺跡は、昭和60・61年度に大規模な発掘調査が実施されており、縄文時代から平安時代に至る複合遺跡であることが判明している。注4今回の調査は、隣接地のパイプライン埋設工事を原因としており、発掘調査から同時期の遺構・遺物の他に、条里畦畔の遺構が良好な状態で確認された。

顔戸遺跡は、高溝遺跡と同様に昭和60・61年度に大規模な発掘調査が実施されており、古墳時代から平安時代に至る複合遺跡であることが判明している。発掘調査からは、古墳時代の竪穴住居跡・大溝などが確認された。注5

さて、塚の越古墳については、古くより知られた前方後円墳である。過去に河川決壊時の復旧に古墳の覆土が運ばれ、石室の石材が庭石に運ばれるといった経緯があり、現在では前方部の一画に覆土を残すばかりで、旧状を留めぬものであった。試掘調査の実施は、古墳周縁部の構造を確認することにあり、本来の古墳規模の追及・周濠の存在の確認・切土工事の影響度の判定などを追及することとなった。調査は途中から発掘調査へと発展し、引き続き近江町教育委員会が担当した。調査の結果については、本報告書に述べる次第である。

第2章 位置と環境

調査地は、滋賀県坂田郡近江町大字新庄字塚の越に位置する。この古墳のある近江町は、琵琶湖の北東縁部に存在し、JR東海道新幹線「米原駅」の北東側に拡がる小規模の町である。現在では、北陸方面に続く国道8号線と東海地方に続く21号線が合流しており、近畿・北陸・東海を結ぶ交通の要衝であるが、この状況は古代より共通したものであり、周知遺跡の分布密度が極めて高い一帯としても知られるところである。

町の中央部には、「日撫山」がそびえ、西方の琵琶湖、南方の天野川との間にL字形の狭い平野部を残している。この日撫山は、横山丘陵の南東端部を示す名称で、別名「顔戸山」や「朝妻山」と呼称されている。横山丘陵は、長浜平野の東端を南北に伸びる丘陵で、その北端部にあたる長浜市東上坂には、5世紀の前葉の茶臼山古墳をはじめ「長浜古墳群」が築かれる。これに対して同丘陵の南端部にあたる坂田郡近江町には、5世紀中葉の顔戸山砦1号墳をはじめ「息長古墳群」が築かれる。

これら両古墳群では、弥生時代の後期より首長墓の構築箇所が近接しており、長浜古墳群では「越前塚（こしまえづか）遺跡」が隣接し、活発に方形周溝墓が構築されている。一方の息長古墳群においても、「法勝寺遺跡（ほうしょうじ）遺跡」や「西円寺（さいえんじ）遺跡」が隣接して築かれる。法勝寺遺跡では弥生時代中期より方形周溝墓の構築が活発化し、後期に至ると前方後方形周溝墓が構築される。^{註6}また西円寺遺跡では、弥生時代終

1. 法勝寺SDX23
2. 西円寺第1号墓
3. アミタビ遺跡
4. 日撫山古墳
5. 顔戸山砦1号墳
6. 甲塚1号墳
7. 甲塚2号墳
8. 定納古墳群
9. 後別当古墳
10. 大正寺古墳
11. 大乾1号墳
12. 西円寺第3号墓
13. 埋塚遺跡
14. 塚の越古墳
15. 狐塚古墳群
16. 山津照神社古墳
17. 人塚山古墳



第3図 息長古墳群の配置 (S=1:40,000)

末期より円形周溝墓と方形周溝墓の構築が続き、5世紀の後葉に至るまで、遺構の構築は続く。

息長古墳群の構築は、日撫山の丘陵尾根部とさらに東方の定納丘陵尾根部において開始される。まず日撫山の丘陵尾根部では、「顔戸山砦1号墳（円墳）」、「日撫山古墳（方墳）」、「アミタビ遺跡（円墳）」の一群が出現する。最も東側に位置する顔戸山砦1号墳は、これらの古墳群の中で最も標高の高い位置にあり、唯一遺物の出土が知られている。これは二次調整を施す円筒埴輪片であり、5世紀中葉のものと推測される。次に日撫山古墳は、顔戸山砦1号墳の西側に位置し、長方形プランの方墳と解釈されている。また最も西側にあるアミタビ遺跡は、直径20m前後の円形平面を呈しており、高さの低い墳墓として推測されているが、実態については全く不明である。

次に定納丘陵尾根部にも古墳の構築が認められる。これらには、「甲塚1号墳」、「同2号墳（円墳）」、「定納古墳群（円墳ほか6基）」などが含まれる。甲塚1号墳は、直径約35mの円墳であり、小形の円墳（甲塚2号墳）を隣接させる。甲塚古墳より低い丘陵尾根には、6基の円墳で構成される定納古墳群がある。定納古墳群の古墳は、いずれも小規模のもので、高さの低いものが多い。

これに続く5世紀後葉の古墳は、同丘陵上には無く、別の独立小丘陵上と平地に築かれる。別の独立小丘陵に築かれた古墳には「後別当古墳（帆立貝形古墳）」、「大正寺古墳（円墳）」がある。後別当古墳は、全長40m級の帆立貝形古墳とされ、後円部の一部が掘削工事によって露頭している。また、この古墳の東側には大正寺古墳が所在し、円墳である。

平地に築かれた古墳には、「埋塚遺跡（推定方墳）」、「西円寺3号墓（円墳）」が含まれる。平地に築かれたこれらの古墳は、既に平地に埋没しているが、これは水田開発に関連した平安時代の行為である。埋塚遺跡・西円寺第3号墓とともに須恵器等の遺物を出土しており、TK23併行期の古墳と推測される。またさらに天野川下流2kmに所在する「大乾1号墳（円墳）」もこの範疇に入るものと思われる。

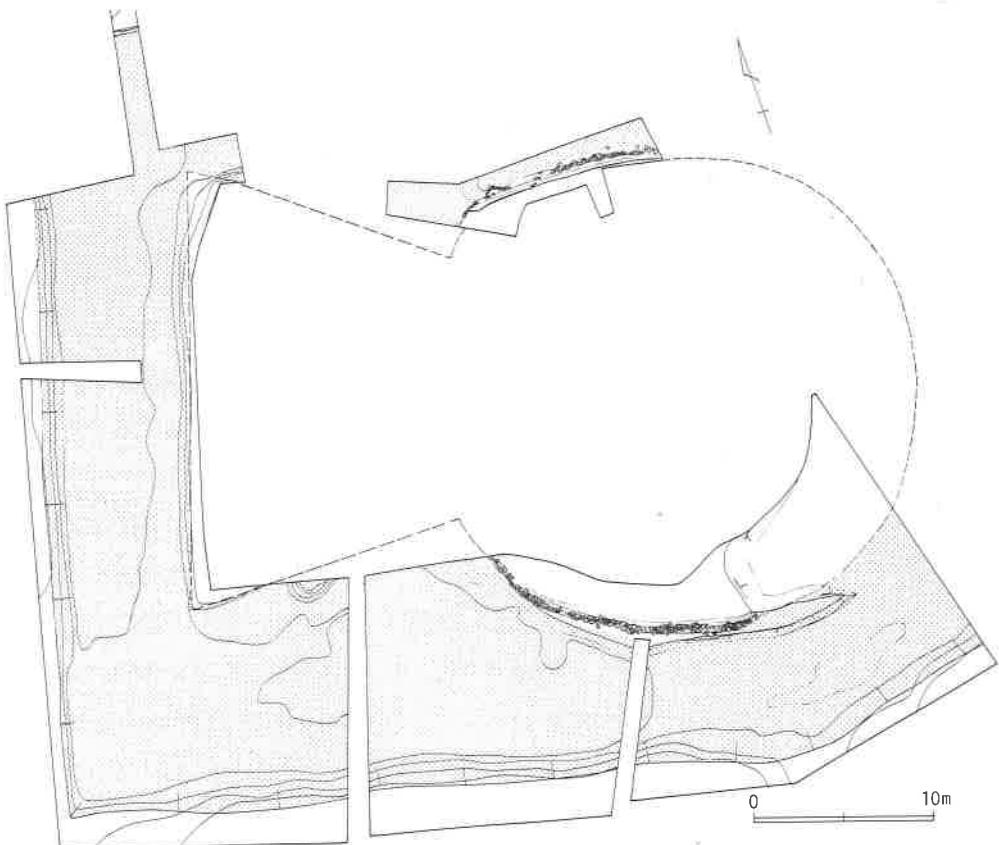
6世紀代になると、平野部に「塚の越古墳」が築かれる。西側に前方部、東側に後円部をもつ東西主軸の前方後円墳である。この古墳では、二次調整をしない円筒埴輪と器財埴輪が出土する。さらに6世紀代の古墳は、「狐塚古墳群（帆立貝形古墳1・円墳4）」、「山津照神社古墳（前方後円墳）」へと続く。狐塚古墳群では、帆立貝形をした5号墳が最も古く。造り出し部分より、多彩な器財埴輪が出土している。また、最も後出する山津照神社古墳の横穴式石室からは、冠帽・馬具などが出土している。

塚の越古墳に後出する古墳としては、人塚山古墳が挙げられる。円墳あるいは帆立貝形古墳とされ、遺物の出土が知られる。^{註7}

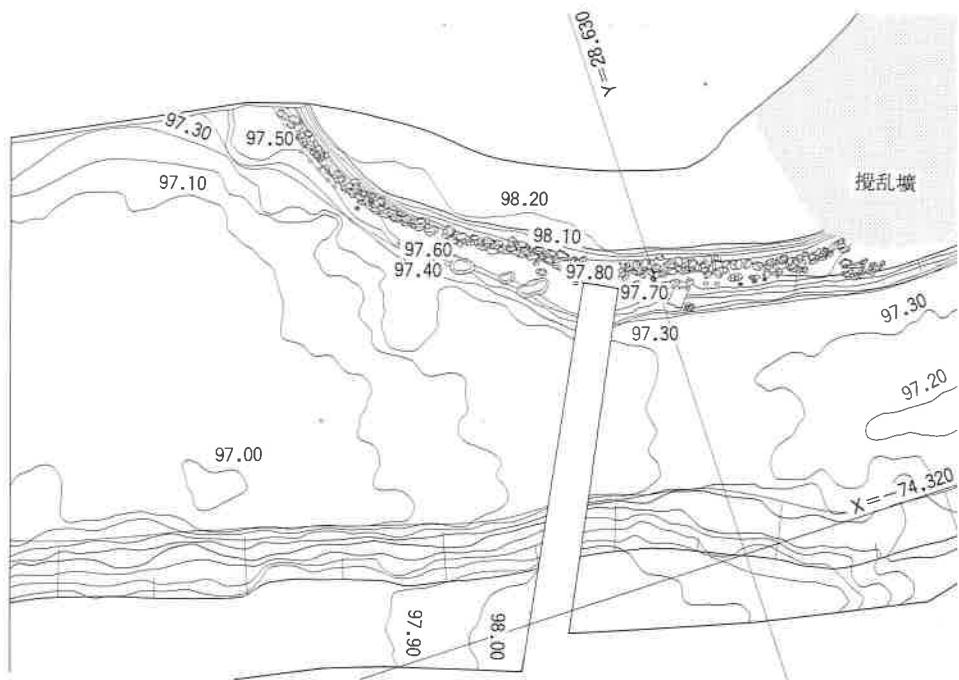
第3章 調査結果の概略

塚の越古墳の調査（第1次調査）については、平成元年10月15日に開始し、平成2年2月10日に終了した。先の章で記したとおり、この調査は県営ほ場整備に関連して実施されたが、これによって古墳の拡がりが確認され、隣接における県営かんがい排水事業に関連して第2次調査の必要が生じた。これについては、平成2年3月1日より5日の期間で実施した。

塚の越古墳の東隣には、北陸自動車道とその側道が伸びており、同道路建設設計画時において、塚の越古墳は工事に影響の無い文化財包蔵地として判断されていた。このため古墳は現存する東西30m規模を全長として復原されてきた。平成元年度に計画されたほ場整備事業では、古墳の南側に切土工事、西側に排水路建設と切土工事、東側にかんがい排水路建設が、それぞれ計画されていた為、本来の古墳規模の追及・周濠の存在の確認・切土工事の影響度の判定などを追及すべく調査トレンチを設定した。



第4図 塚の越古墳全体図



第5図 検出した後円部と周濠 (S=1:200)

調査によって明らかにされた古墳の規模は、第4図に示すとおりである。また当初より目的としていた点についても以下のことが判明した。

まず第一に、本来の古墳規模については、現存する範囲よりもかなり大きなものであることが判明した。復元された古墳の規模は、全長約40,4m、後円部径約26,7m、前方部最大幅約24,5mである。特に後円部が従来周知されていた規模よりも非常に大きく、北陸自動車道および側道下に伸びることが明らかとなった。側道下の遺構については、県営かんがい排水事業に関連した第2次調査によって、その一部を検出した。墳丘の裾は、葺石によって区画されており、三段程度の葺石が確認された。また検出された後円部の東部では、後世の擾乱壙が発見された。

第二に、周濠の存在が確認された。北陸自動車道建設以前の航空写真や、現状の水田地割から、塚の越古墳は周濠を持たないと推測されてきた。しかしながら、今回の発掘調査によって前方部の正面で約9m、後円部の横側で約7mの位置まで拡がる周濠が確認された。

第三に、本来の墳丘部分が水田下より確認されたことによって、切土工事による遺構への影響が判明した。このことについては、調査終了後に滋賀県農林部・長浜県事務所土地改良課・地元地権者との間で工事計画の変更協議が繰り返され、現状のままの水田とすることで、検出した古墳の遺構は再び地下に現状保存されることとなった。

第4章 調査の視点

今回の発掘調査は、冬場における短期間の調査であったため、充分な検討をすることができず、また整理調査においても時間的な制約から、満足のいく徹底した調査は実施されていない。ここに報告する調査の視点は、限られた時間内で追及できた塚の越古墳の実態である。

古墳の規模と形状

先に記したとおり、復元された古墳の規模は、全長約40,4m、後円部径約26,7m、前方部最大幅約24,5mである。また、これを取り囲む周濠の規模は、東西主軸が約58m・南北幅が約42mと推測される。後円部の最大径は、前方部の幅より大きいのが1つ目の特徴。また後円部と前方部の接合点のくびれが小さく、幅広の感じを残すのが2つ目の特徴である。

構築の過程

塚の越古墳は、原則として黄褐色粘土層を基盤層として構築されている。この基盤層を掘削して周濠部が構築され、その排土は墳丘の覆土として活用されている。基盤層を約40cm掘り下げるに、幅20cm前後の砂礫層が検出される。この砂礫層の直上に加重を掛ける形で葺石が施される。葺石は所謂「山石」で構成されており、基底部の砂礫層が欠損した箇所では、葺石が裾部から崩落した状態を確認した。

古墳構築の基盤層である黄色粘土層については、本来水平な堆積を示しておらず、前方部正面側では不足した分が盛土によって補われている。特に、この傾向は前方部の裾付近や周濠の対岸で顕著であり、周濠の範囲確認や、古墳裾部の決定を困難にするものであった。盛土の多くは暗灰褐色土で構成されており、周濠の埋土と酷似したものであった。

古墳は、東西方向に主軸を保った前方後円墳である。これは、陽のあたる南側から見た側面感を意識した構造になっており、一目で「前方後円墳」を意識させるだけでなく、葺石の構成、周濠の深度など南側を良好に造り、北側を簡素に造る傾向が認められた。

前方部南側面において、当初「造りだし」状の高まりを検出し、地形図にセンターを残した。この高まりについては、調査終了時に古墳覆土の転落という解釈をするに至り、造りだしの存在は消失した。

前方部の埴輪列

古墳前方部の南側面において、多量の埴輪堆積が確認された。この埴輪堆積は、厚さ30cmを超えるもので、上層では、細片が多く。下層では一個体の単位が明瞭なものが多く確認された。

これらの埴輪の堆積から前方部の側面には、埴輪列が存在したものと推測されるが、現在では、覆土が完全に消失しており、実証することはできない。

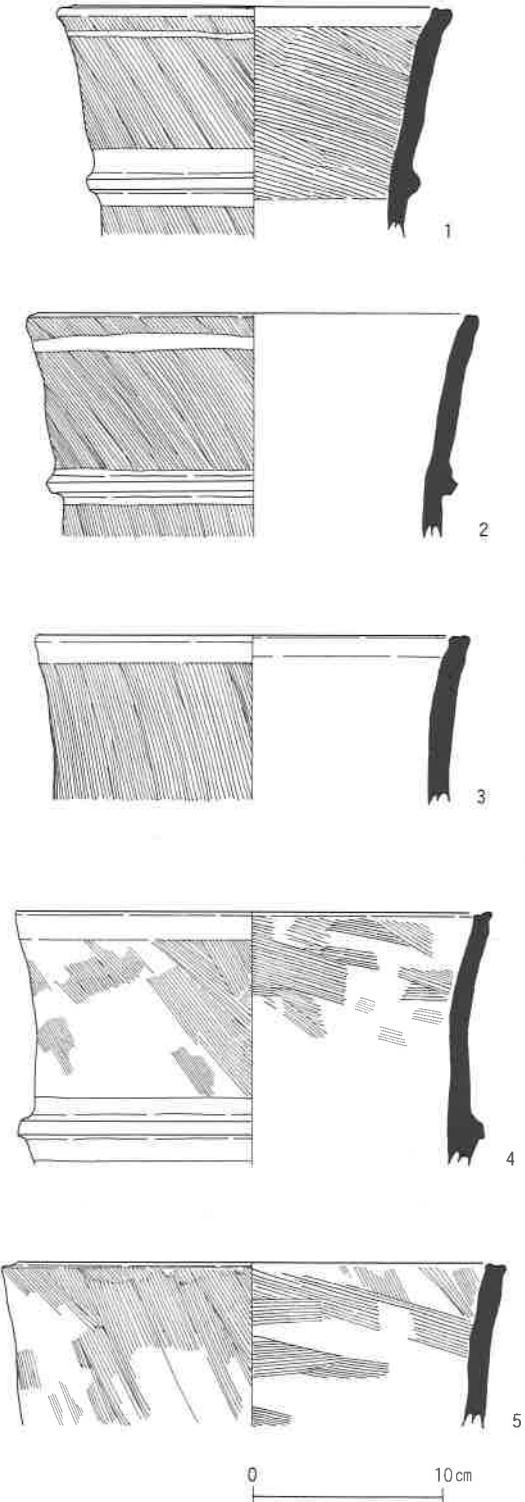
埴輪は、円筒埴輪と朝顔型埴輪で構成されており、一部に器財埴輪が混入して状態であった。

このうち朝顔型埴輪については、上端部まで良好に遺存したものが皆無であり、図化することができなかつたが、頸部の形状から、上部のあまり拡がらないもので、近江町内の狐塚古墳群や山津照神社古墳出土の朝顔型埴輪と同類の傾向を示すことが予測される。^{註8}

出土量の最も多い円筒埴輪には、口径20.4cm～39.2cmのものがあるが、平均30cm前後のものが主流である。

円筒埴輪には、二次調整を施すものが、一部に認められるが、絶対量は少なく、大半の埴輪は、川西編年の第V期に分類されるもので、^{註9} 1次調整としてタテハケを有し、2次調整を欠くものである。

第6図から第9図に示したものが、前方部側面から出土した円筒埴輪である。口縁部を残す(1)～(9)は、いずれも逆ハの字形に拡がる一般的な構造を示し

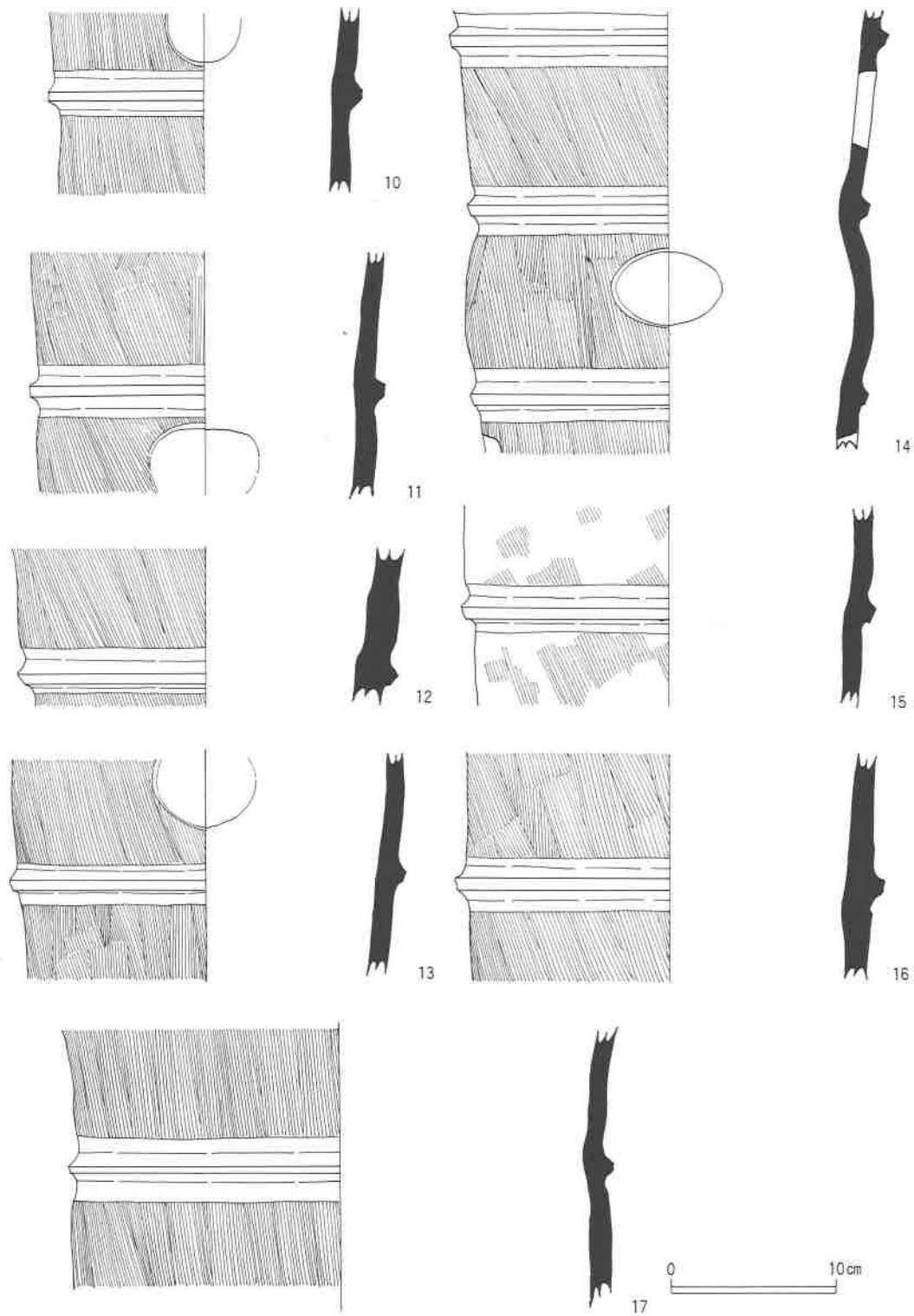


第5図 円筒埴輪実測図(1)

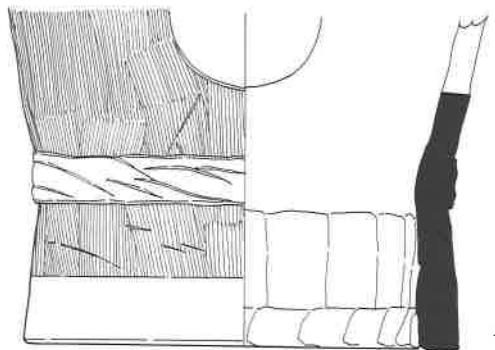


第7図 円筒埴輪実測図(2)

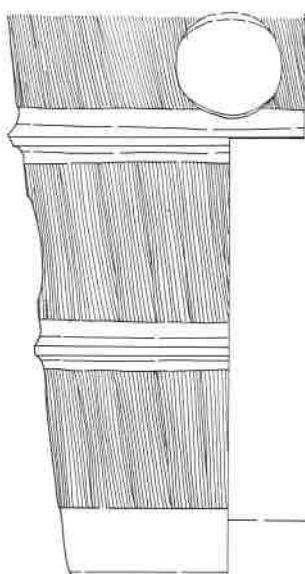
ている。1次調整のタテハケは、器壁全面を覆っているが、(4・5)のように器壁の摩耗した軟質のものも多く含まれている。(1・2)では口縁部下方に一条のナデが認められ、(6)では、ヘラ記号状の施文が認められる。



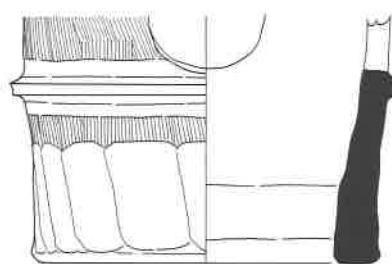
第8図 円筒埴輪実測図(3)



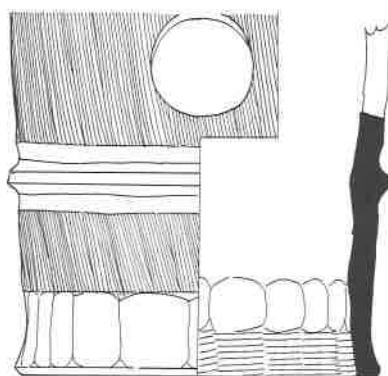
18



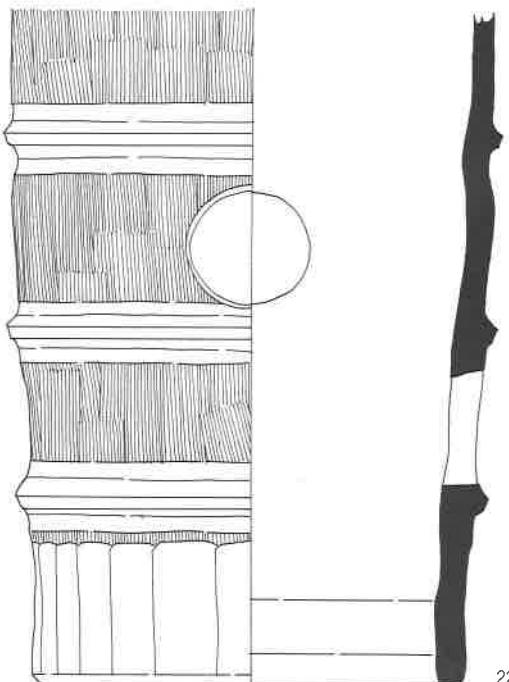
21



19



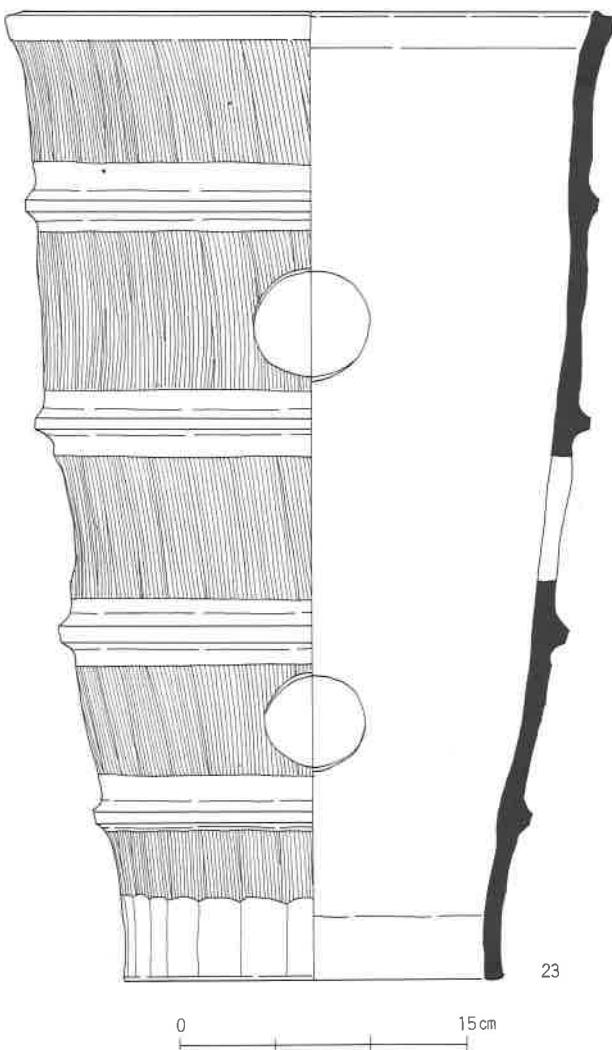
20



22

0 20 cm

第9図 円筒埴輪実測図(4)

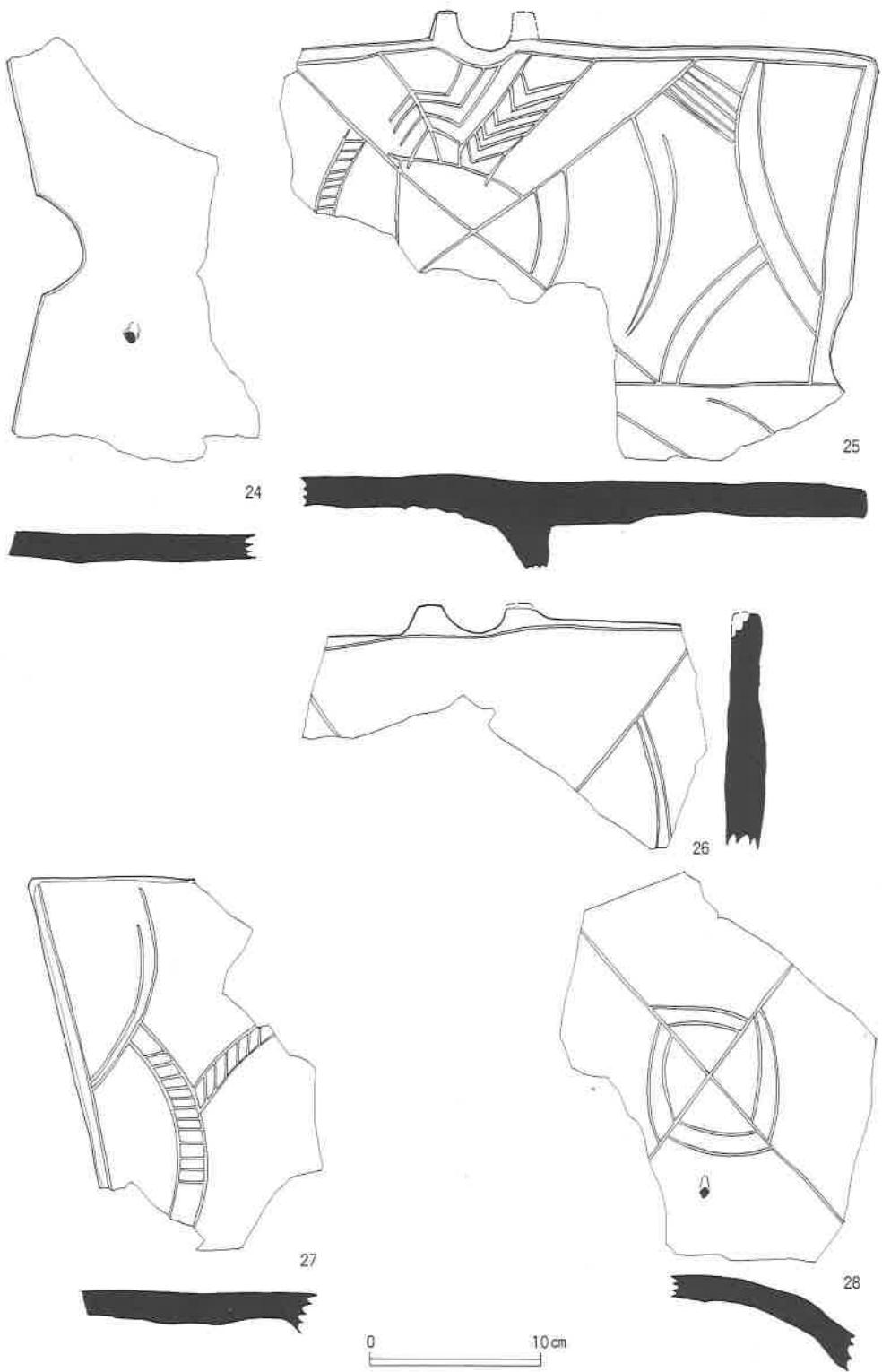


第10図 塚の越古墳の円筒埴輪

第8図に掲載した実測図は、円筒埴輪の胴中央部である。タガは一定の間隔で作られており、正円形ないし椿円形の透しが開けられている。(14)は須恵質の埴輪であり、この種のものは、筒部に膨らみをもつ。

第9図に掲載した実測図は、円筒埴輪の底部である。(18)は幅広で、扁平なタガをもつ。このタガには、ねじりを連想させる斜めの筋が付き、底部内面に調整痕を残している。この埴輪については、円筒以外の埴輪となる可能性を残す。(19・20・22)は底部外面に調整痕を残し、(21)はナデ調整によってタテハケを消す。

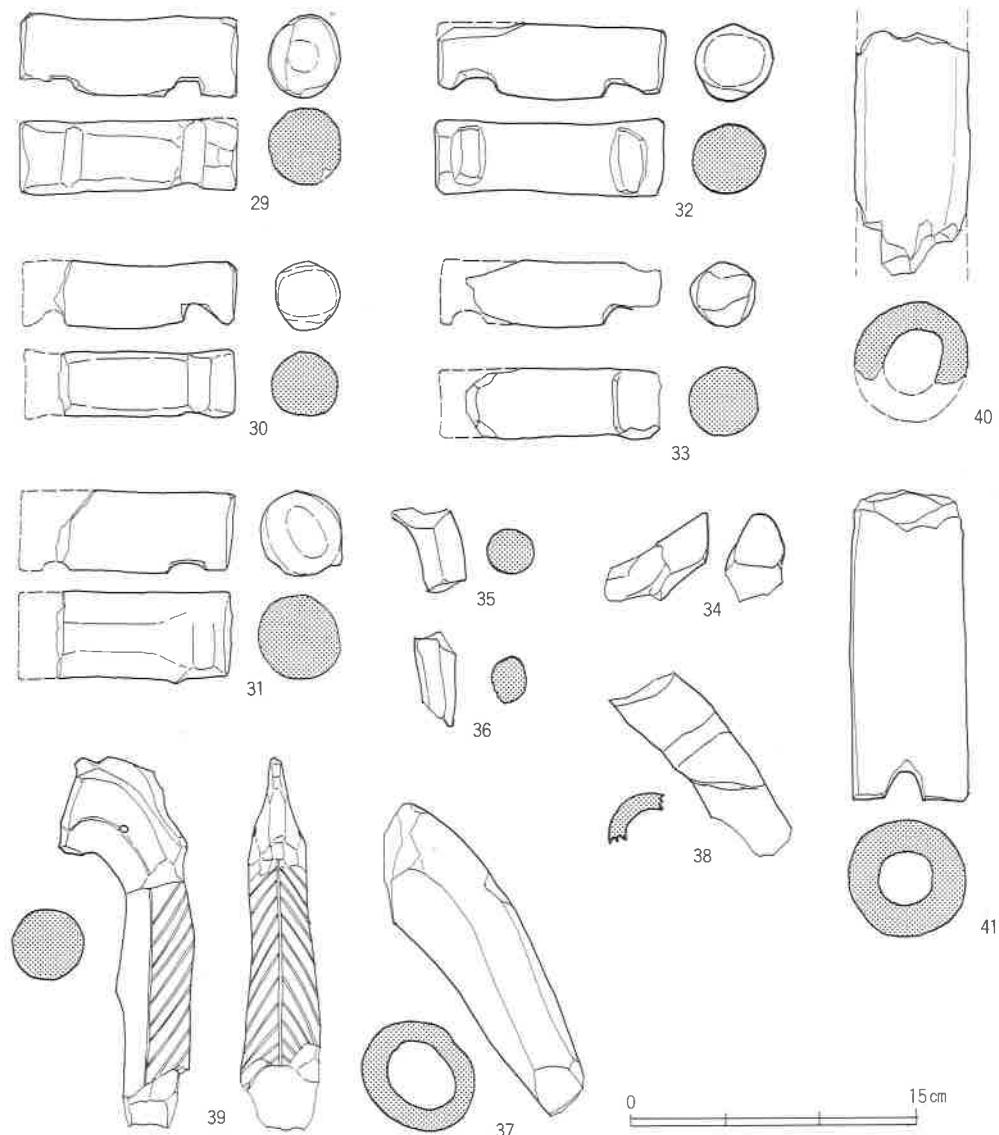
第10図に掲載した円筒埴輪は、唯一全形の復原できたものである。器高51.0cm・口径32.2cm・底径20.0cmを測り、定間隔のタガと底部調整を残す。



第11図 盾型埴輪実測図

後円部の埴輪列

今回の調査では、塚の越古墳の後円部に「石見型盾埴輪」の配列があったと予測された。これは、約4mの間隔を保ちながら同盾型埴輪が出土していることに原因している。ここで出土した埴輪は8個体あり、うち2個体が複数の破片から構成されており、6個体が細片の出土を示している。現段階の整理では復原されたもののがなく、第11図に一部を紹介するのみである。(24)は盾の側方部。中央に抉りがあり、斜め上方から開けられた穴を残す。(25)は盾の左上部にあたる。上部の中央には僅かな抉りがあり、その両端に突起を残す。



第12図 形象埴輪実測図

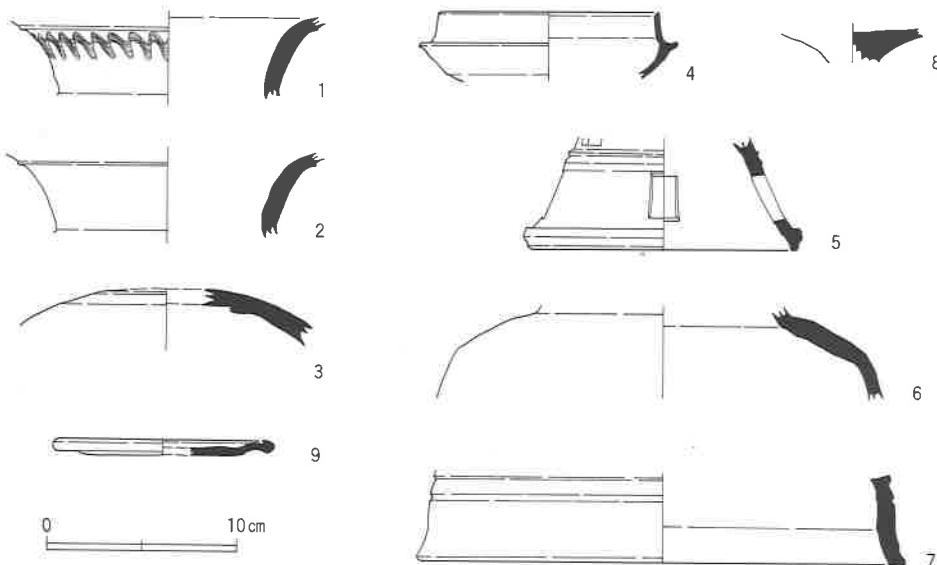
ともなう。(26) は同じ位置を残す別個体の盾型埴輪である。(27) は以上 2 点とも異なる盾で横上部を示す。(28) は盾の中央部を示すもので、盾の断面が曲線化している。これらの盾型埴輪には、石見型埴輪特有の施文と穿孔を伴っている。

また、第12図に掲載したものは、後円部側方の周濠内より出土した形象埴輪である。(29~33) は家型埴輪の棟上に載る堅魚木である。棟上に二条のタガが並行し、その上に嵌め込まれる。滋賀県近江八幡市供養塚古墳の出土資料と酷似する。(34) は家型埴輪の妻側の装飾部であり、梁を表わす箇所にあたる。(35~37) は人物埴輪の一部にあたる。(37) は左腕に相当する。(39) は鶴型埴輪である。トサカの一部を欠損しているが、背中に線刻を施す。左右の目をもつ。(40・41) は馬型埴輪の足部にあたる。この他に、馬型埴輪の尻尾部の破片(38)がある。

出土した須恵器と土師器

墳丘上に並べられた埴輪と異なり、本来石室内に置かれた土器類の出土は極めて少ない。(1~7) は須恵器、(8・9) は土師器である。

(1・2) は頸部。いずれも上方に稜線をもち、(1) は波状文を巡らせるが、(2) は装飾されない。(3) は提瓶。断面表現のため、転倒した図を掲載した。(4) は杯身。(5) は高杯の脚部。(6) は壺の体部上半。(7) は器台の脚部である。また(8) は土師器の高杯片。これらの遺物は、須恵器の編年観から T K47併行期と推測される。また(9) は、周濠の埋土上方から出土した平安時代中期の所謂「ての字皿」である。

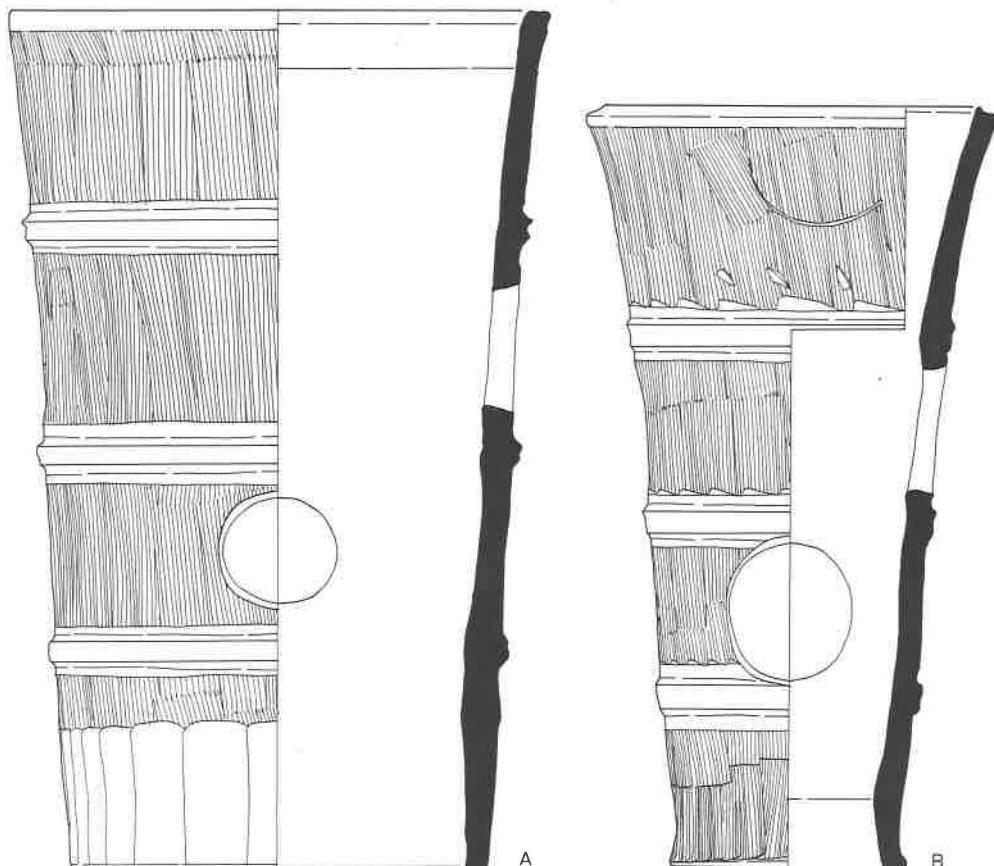


第13図 出土した土器

第5章 まとめ

塚の越古墳は、6世紀初頭に築かれた前方後円墳である。この古墳は息長古墳群の中にあって、始めて平地に構築された古墳であった。東西方向に主軸を保った前方後円墳の構築は、陽の当たる側からの視覚を充分に意識した「南から見た側面観」を重視したものである。周濠の規模、葺石の構造、埴輪列の量、盾形埴輪の配置など、いずれも南側を重視したものであり、東西主軸にとることで「前方後円墳」を意識させる様、構築されている。

古墳後円部の裾部には、「石見型盾埴輪」を一定間隔で巡らせた他、木製品（木製埴輪）を巡らせたと推測される柱穴列が確認された。石見型盾埴輪の採用は、滋賀県内で初見である。この埴輪は、奈良県磯城郡三宅町石見遺跡で発見されたことから名付けられおり、現在では「埋没古墳」とされる同遺跡においては、木製埴輪（鳥型木製品・笠型木製品など）と共に出土している。石見遺跡との差違をあげれば、石見型埴輪の基底部の高さの相



第14図 狐塚5号墳出土円筒埴輪 (S=1:4)

違にある。盾型埴輪は、あらかじめ製作した円筒埴輪を倒立させ、その後に盾部を造り足すため高さのあるものとなるのが、石見遺跡出土例などからみても一般的であるが、塚の越古墳出土例では基底部の遺存高が低いことが判明している。このことについては、大阪府羽曳野市輕里4号墳の出土例と共通しており、同遺跡の分析から埴輪の配地時に破碎して器高調整することが推測されている。^{註10}

また、木製埴輪列の存在は、奈良県四条古墳、同小墓古墳、京都府今里車塚、愛知県能田旭古墳などに著名である他、息長古墳群内の近江町狐塚5号墳においても鳥型木製品の出土が知られており、先行する塚の越古墳への採用も充分に予測されるものである。

古墳の前方部側面には、円筒埴輪と朝顔型埴輪を中心とする埴輪列が存在したことは周濠部の堆積から明らかであるが、さらに後円部の墳頂部には、器材埴輪を中心とした埴輪群があったと予測される。古墳の後円部は、既に覆土を失っているが、その一部は周濠内の埋土となっており、内部から出土した家型埴輪、馬型埴輪、人物埴輪、鶏型埴輪などがこれを構成するものと判断される。

近江町内の息長古墳群内においては、山の上の顔戸山砦1号墳と、平地の西円寺第3号墓から川西編年第IV期の埴輪が出土しており、これに続く時期の埴輪として塚の越古墳出土の埴輪が挙げられる。塚の越古墳以降、狐塚古墳群、山津照神社古墳など埴輪の出土量が激しく増加する。これらの埴輪の特徴は、豊富な形象埴輪の所有と、地元産の円筒埴輪・朝顔型埴輪の融合性にある。各古墳から出土する形象埴輪には、その製作技術差から古墳の変遷觀をえるものすら存在するが、円筒埴輪の技法差と供出した須恵器の編年觀から、塚の越古墳の築造を6世紀初頭とし、狐塚5号墳、狐塚1号墳、山津照神社古墳が順に続くものと想定している。第14図に示したものは、狐塚5号墳出土の円筒埴輪である。この古墳では、大別して二形態の円筒埴輪が出土している。まずAタイプとしたものは、口径と器高が共に大きい。塚の越古墳の出土埴輪と共に、一定間隔のタガをもち、底部調整の痕跡を残すが、塚の越古墳のものと比較して、タガの数が減少し、その断面形状も「台形」から「M字形」へと推移していることが明らかである。またBタイプとしたものは、口径と器高が共に小さく、底部調整の痕跡を残さない。このタイプのものから、タガの上部に「断続横ナデ技法」^{註11}が認められる。この技法は、塚の越古墳の資料中には認められないものである。以上2つの古墳の円筒埴輪の比較から、塚の越古墳が狐塚5号墳に先行する古墳と推定される。

滋賀県湖北地域における「息長古墳群」の分析は、近年ようやく開始されたところである。個別の古墳の測量調査や出土遺物の比較検討などを踏まえ、同古墳群の実態が次第に明らかにされよう。また、その中で今回の調査成果が活かされることを望む次第である。

注

- 1, 宮崎幹也『埋塚遺跡 2』(近江町教育委員会 1991)
- 2, 宮崎幹也『埋塚遺跡』(近江町教育委員会 1991) 所収。
- 3, 「淨蓮寺遺跡の調査」(前掲書 2 所収)
- 4, 「高溝遺跡の調査」(前掲書 2 所収)
- 5, 「顔戸遺跡の調査」(前掲書 2 所収)
- 6, 宮崎幹也『法勝寺遺跡』(近江町教育委員会 1990)
- 7, 中川通士『近江町内遺跡分布調査報告書』(近江町教育委員会 1986)
- 8, 田中勝弘・吉田秀則『一般国道 8 号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書IV』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1985)
- 9, 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2 1978)
- 10, 大阪府羽曳野市教育委員会河内一浩氏より軽里 4 号墳出土の石見型埴輪の説明を受けた。記して、謝意を表したい。
- 11, 狐塚 5 号墳および狐塚 1 号墳の円筒埴輪に「断続横ナデ技法」の認められることは、奈良市埋蔵文化財センター鐘方正樹氏と中島和彦氏の御教示によるものである。また器財埴輪と円筒埴輪の編年観については、京都大学文学部考古学研究室高橋克壽氏の御教示によるところが多い、各氏に改めて謝意を表する次第である。

図 版



塚の越古墳空中写真



塚の越古墳全景



全景（南西より）



後円部全景（南西より）



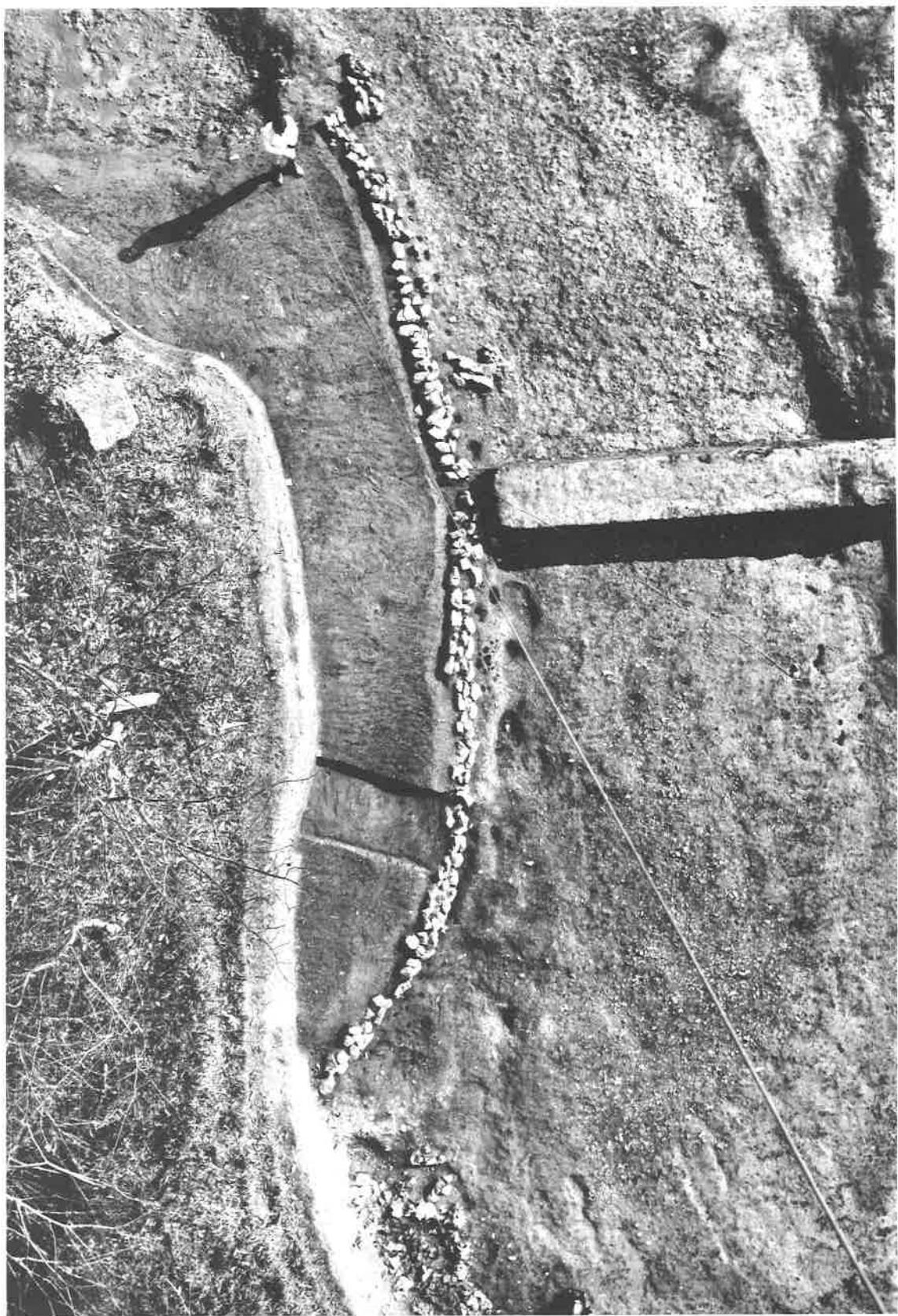
調査風景



試掘調査トレンチ



全景空中写真



検出した後円部



後円部精査状況



後円部の葺石



周濠の土層堆積



周濠の土層堆積



石見型盾埴輪出土状況



石見型盾埴輪出土状況



石見型盾埴輪出土状況



石見型盾埴輪出土状況



前方部横埴輪出土状況



前方部横埴輪出土状況



前方部横埴輪出土状況



前方部横埴輪出土状況



葺石と転落した石



盾型埴輪出土状況



後円部遠景



葺石崩落状況



6



7



14



11



13



10



18



19



39



37



41



38



25



25



9



|



29



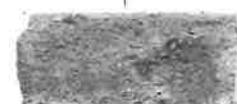
|



32



|



31



|



33

近江町文化財調査報告書第10集

塚の越古墳

1991年3月

編集行　近江町教育委員会
住所　滋賀県坂田郡近江町額戸488-3
電話　0749-52-3111

印刷　有限会社　真陽社
住所　京都市下京区油小路通仏光寺上ル
電話　075-351-6034